

2019年度 公益社団法人乙訓青年会議所
理事長所信

公益社団法人乙訓青年会議所
理事長 三浦 靖

はじめに

「新日本の再建は我々青年の役目である」という覚悟のもと、1949年、明るい豊かな社会の実現を理想とし、日本の青年会議所運動は始まりました。ともに向上し合い、地域に貢献しようという理念のもとに各地に次々と青年会議所が誕生する中で、「今こそ我々は、郷土愛を再認識し、自らの研鑽を通じて友情を深め、明るい豊かな社会の建設に貢献しなければならない」という高い志をもった14名の青年たちによって、1979年に全国で659番目の青年会議所として乙訓青年会議所は誕生致しました。「奉仕」「修練」「友情」の三信条のもと、それぞれの時代で人は変わり、手法や表現は異なっても、創始の「志」は脈々と受け継がれてきました。この偉大な先輩諸兄姉の手で綴られた年代記も、今年で40年目を迎えることができました。この大きな節目を迎えられることへの感謝の念を抱き、これからも未来を明るく豊かにできるのは志を受け継いだ我々青年です。40周年を迎える本年度は、過去の検証を踏まえた新たなVisionを打ち出し、地域の発展に寄与すべく運動を展開していかねばなりません。そのために、乙訓青年会議所メンバー一人ひとりがJAYCEEとしての気概と先輩諸兄姉から受け継いだ志を胸に、地域の負託と信頼に応え続けていく必要があります。

「新」に挑む ～志を胸に新たな価値を創造しよう～

「未来を予測する最善の方法は、それを発明することだ」という言葉があります。これは、パーソナルコンピュータの父と言われ、アメリカの教育者でもあるアラン・ケイ氏による言葉です。この言葉にある通り、未来を予測して切り開き、変化の激しい時代に活躍する人財となるためには、自ら学び、考え、行動し、新たな価値を創り出すことが必要です。このような時代では、今もっているスキルや知識はすぐに陳腐化してしまいます。まずは、時代にそぐわないスキルは今すぐに見直し、常に貪欲に新しいスキルを学び続けることが重要です。そして、乙訓青年会議所が進化するためには、新たな課題に取り組み、社会の問題を解決するだけでなく、社会に価値を創造し、これが未来の価値だと見定める、価値そのものをデザインするリーダーとなり、社会に持続的なインパクトを与え、新しい時代に必要とされる能力を備えた組織へと成らねばなりません。また、設立より39年という月日が流れ、新しい年号に変わる2019年度に、曇りなき眼で見定めた新しい扉を開き、未来の礎を築くという同じ志をもった本気で取り組むJAYCEEを育成し、魅力ある地域の創造に挑んでいきます。

新たな価値を創造する人財を育成しよう

あなたは「何のためにJCをやっているのですか。」今、目的をもって青年会議所活動をしているメンバーは少ないのではないのでしょうか。青年会議所とは何なのか、青年会議所がこの乙訓(まち)からなくなったらなぜ困るのか、その答えを明確にするためには、青年会議所と自分との関わり合いについて真剣に考え、明確な目的意識をもてる乙訓青年会議所であることが必要です。まずは、「何のために」を明確にするために、メンバー一人ひとりが青年会議所の育成プログラムを実体験し、青年会議所活動を通して「自己成長する」と同時に「地域も社業も発展する」ことを関連付けて学ぶことで、青年会議所活動における目的を明確化します。そして、目的意識を醸成させたJAYCEEへと成長するために、メンバー一人ひとりに実りあるプログラムを選定し、明確に示せる計画立案と活動を通して学ぶことで、自己成長と自社成長の機会を提供します。さらに、新たな価値を創造し、変革を起こせる人財を育てるために、メンバーが地域への興味や関心を高め、主体的に地域に貢献することで、乙訓(まち)により必要とされる組織へと変革します。社業と青年会議所活動を同等に捉えて発展するために実践し、あらゆる困難を乗り越えた先にある意識変革こそが我々の自己成長の機会なのです。地域と組織の明るい未来のために新しい価値を創造する人財を育成します。

スケールメリットを活かしたJCネットワークを構築しよう

青年会議所活動は、国際青年会議所や、日本青年会議所・近畿地区協議会・京都ブロック協議会といった、より広い地域を対象とした、LOMとはまた違う出向という、最高の自己成長の機会があります。そこには他LOMのメンバーと出会い、ともに活動することで新たな友情を築き得るといふ魅力があります。また、「LOMの看板を背負っている」という気概をもって、出向という大きな壁に挑むことで、今までに得た自信と経験と実績が試され、自分の置かれている立ち位置を知り、新たな成長への道が見えるのです。まずは、出向のスケールメリットを活用するために、近隣LOMの若きリーダーたちと楽しみながら切磋琢磨できる交流の機会を設け、出向者とLOMとの連動性を高めることで、出向者が活動しやすい環境づくりを推進します。そして、出向というスケールでの強烈な意識変革の原体験を通して、自己成長を遂げた出向者が、広い繋がりと視野をもって臨機応変に行動できる組織へとLOMを導きます。さらに、出向を通じた組織力の向上を図るために、出向者が出向で得られた成果を報告し、出向先での活躍や成長体験によって出向していないメンバーを感化することで、出向での学びを必ずLOMに還元します。また、1年間の集大成となる最後を飾るために、出向先で得た経験や学びを活かし、LOMにフィードバックすることで、感動的スケール感のある事業を創造します。最後まであきらめず確固たる信念をもってやりきった者だけに見える景色と、達成感から自己成長を味わうことで乙訓青年会議所がさらに発展していくものと確信しています。

防災から学ぶ生き抜く力を子供たちが身に付けよう

記憶に新しい自然災害は、大阪府北部地震、北海道胆振東部地震、西日本豪雨、近畿地方を中心に大きな被害を出した台風21号です。近年、我々人間には抗えない自然による災害がどの地域でも起こるようになってきています。その度に、国や地域は対応をしていますが、有事の際には自分の命を自分で守る「生き抜く力」が最も重要です。例えば、危険な状況下でも九死に一生を得ている人たちがいます。その人たちは偶然などではなく、少なからず生き抜くための知恵や経験の備えがあり、危険を察知して行動を起こしていたということは確かですが、子供たちはどうでしょうか。体が小さく身体能力が未熟で、一人で正しい判断をすることが難しい子供たちは、災害時にはいっそうの弱者になります。国の統計によると、すべての年代で不慮の事故や交通事故による死亡率は年々減少傾向であることに對し、阪神・淡路大震災（1995年）や東日本大震災（2011年）をはじめとする未曾有の大災害が起きた年には高齢者以上に、若年層の死亡率が増加します。まずは、災害時に子供たちがどんな状況下におかれても安心して住むことができる乙訓(まち)を創造するために、自然資源の活用を考えるグリーンレジリエンスの推奨や地域の教育機関とパートナーシップを築くことで、自らの学びを得る機会を創出し、新しい時代に必要な危機管理能力を身に付けます。そして、子供たちも危険を察知する知識と生き抜くための力を身に付けるために、過去の取り組みや実体験に裏打ちされた原体験を学んで頂き、自分の住んでいる地域特性を知り、災害に備えた知識、体験、その後の行動すべてを学ぶことで、自助の自覚をもって頂きます。自然災害に強いまちづくりとは、自らの安全を自ら守る「自助」、地域の住民が互いに助け合う「互助」、事業者やその他の地域に関わる人々が連携し助け合う「共助」及び公的機関が援助を行う「公助」を基本として実施されなければなりません。自然災害が起きにくい乙訓(まち)という認識は今すぐに捨て、地域の子供は地域で守り育てましょう。

地域から共感を得られる新たな価値を発信しよう

乙訓青年会議所は長年、地域のために様々な運動を展開してまいりました。我々の運動を地域に広げ、理解して頂くためには情報の発信は欠かすことができません。我々は情報化社会が発達する中で、SNSやメディアなど様々な手法を活用して青年会議所運動を地域に発信してきました。しかし、市民にとって我々の活動、運動の認知度は未だ十分とは言えず、青年会議所運動が自己満足で終わっていないか、目的や理念が正しく市民に伝わっているのかを検証しなければなりません。まずは、情報の発信を今まで以上に強化するために、広報戦略会議を実施することで、戦略をもった情報の収集と構成を行います。そして、魅力に溢れ地域社会から信頼される組織へと進化するために、私たちの運動を一方向的に発信するだけでなく、地域にアンテナを張り続けることで、地域を巻き込んだ持続可能な新しいコンテンツを生む新しい広報ムーブメントを起こします。さらに、持続的な共感を生む情報発信を確立するために、メンバー全員が長年培ってきた人との繋がりが、SNS、メディア等を活かしたマーケット・ターゲティングを行い、情報を発信し続けること

で、地域を巻き込んだ新たな広報ムーブメントが地域や市民を活性化します。また、市民の政治への関心を高めるために、ネット配信による公開討論会も視野に入れ、有権者に政策を判断できる情報を提供することで、政策本位による政治選択の意識向上に繋がります。乙訓青年会議所が地域に必要とされる組織として共感と賛同を得るために、単なる広報を脱したムーブメントとして発信しましょう。

感謝を胸に新たな価値を創造しよう

1979年に乙訓青年会議所が誕生し、本年度で40年目を迎えます。39年間継続することができたのは、乙訓青年会議所を立ち上げられたチャーターメンバーをはじめ、志高く活動されてきた先輩諸兄姉がこれまでに、時代に即して「変えるもの」「変えないもの」の取捨選択をし、様々な課題や困難を乗り越えて、一致団結して運動を続けてこられた賜物であります。その覚悟ある行動の積み重ねは、地域や行政、各諸団体との信頼を生み、私たちはこの繋がりの中で存在し活動しています。先輩諸兄姉への感謝と敬意を表し、過去を学ぶことで、初めて次の未来を見据えることができるのです。まずは、今の景況感を不安に感じる人が多い中で、乙訓地域の明るい未来のために、乙訓青年会議所の存在意義を再認識し、乙訓地域をベースとしたコミュニティーを確立することで、最前線で地域を担っていく我々が青年会議所運動に邁進します。そして、我々の運動が地域から必要とされるために、新たな価値を創造し、地域に認められることで、乙訓青年会議所としての誇りが生まれ、我々の自信へと繋がります。さらに、定めた方向性を全員で共有するために、5年後に向けて進むべきVisionを描き、一丸となって取り組むことで、「この地域のためにできること」そして「JCにしかできないこと」を創造します。先輩諸兄姉が築き上げてきた歴史に感謝の心を忘れず、我々の運動を昇華させ、未来への懸橋となる唯一無二の存在であり続けましょう。

規律ある組織運営で下支えしよう

公益法人として地域に根差した運動を展開する乙訓青年会議所の存続発展には、公益性とコンプライアンスの確保はなくてはならない要素です。しかし、入会歴の浅いメンバーが役職を担い、平均在籍年数が短くなっている現在、その意識の浸透は容易ではありません。まずは、公益法人としてさらなる発展を目指すために、メンバー一人ひとりが責任と自覚を持ち、コンプライアンス意識を向上すると同時に、組織的なコンプライアンスの確認体制を強化し、組織のガバナンスを強化します。そして、青年会議所は我々が最大限の力を発揮するために「計画、実行、結果検証、改善」というPDCAサイクルに沿って活動し、乙訓青年会議所の39年間で築き上げてきた組織体系や会議を効率的に運用するためのシステムが存在します。会議は議論のうえで計画を決定し、報告を承認する場であって、議案を改善する場ではありません。先輩諸兄姉が培われてこられた会議運営を継承しながら、議案上程時に建設的で活発な議論が展開できるように、各委員会と意思の疎通を密に図り議案を精査することで、正確で迅速かつ効率的な会議運営を行わなければ

なりません。明るい豊かな社会の実現に向けて挑戦し続ける組織の礎として、よりよい会議運営、各委員会の議案精査を徹底して、効率的で実り多い会議を実現しましょう。次年度以降に1年間の活動で作上げた実績と人財を引き継いでいくこと、また社会に貢献したいと思う人々の想いを形にするべくクラウドファンディングの活用も視野に入れることで、新たな挑戦をより大きな力に変えていきます。

未来の組織と地域のために仲間の輪を拡げ続けよう

「会員拡大とは究極の青年会議所運動である。」これは明るい豊かな社会の実現に向けて運動を続ける青年会議所にとって、共感する仲間を増やすことが青年会議所運動の根幹であるということの意味します。この地域に暮らす同じ時代を生きる青年と、この乙訓(まち)が抱える問題を語り合い、共感を得て、ともに活動してくれる仲間を増やすことができれば、結果として数は力となり、我々の運動が地域社会に与える影響をより大きくし、地域からの大きな負託と信頼を得ることに繋がります。それはやがて、メンバーの誇りとなり、誇りをもったメンバーが真摯に会員拡大活動に取り組めば、運動の輪は加速的に拡がり続けるのです。また、会員拡大の結果における数値とは、我々の運動に対する地域社会の評価そのものであり、我々の活動の最も分かりやすい成果でもあります。会員が増えないということは我々の運動や会員自身が地域からまだ認められていないと謙虚に捉え、今後の組織や会員各々のあり方を検証しなければなりません。「自分がしなくても誰かがやってくれる。」ではなく、「組織として数的根拠に基づき設定された目標を確実に達成する。」に変わらなければいけません。そのためにも会議体を構成し、メンバーの主体者意識に支えられた組織的な会員拡大活動の持続化を目指し、PDCAサイクルを回すことで、未来に引き継ぐ会員拡大の新たなシステムを構築します。未来の組織と地域のために会員拡大とは全メンバーに課せられた責務なのです。

むすびに

創立40年目となる本年、常に変化し続ける現代とともに、組織として進化し続けるために、新たな変革に挑戦し、展開する運動や我々自身も変革を遂げなければなりません。しかし重要なことは全てを変えるのではなく、変えていかなければならないことと、変えてはいけないことをしっかりと見極めることが重要なのです。何のために、誰のために、どのような変革が必要なのかをメンバー全員が共通認識としてもち、取り組むことで、我々が地域から負託と信頼を得る、自らを誇れる組織として、志を胸に新たな価値を創造します。